

若年層における日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続要因の探索的検討

元嶋, 菜美香
九州産業大学健康・スポーツ科学センター

相羽, 枝莉子
長崎国際大学人間社会学部

宮良, 俊行
聖カタリナ大学人間健康福祉学

<https://doi.org/10.15017/6776445>

出版情報：健康科学. 45, pp.35-44, 2023-03-27. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：

—原 著—

若年層における日常的なスポーツを「ささえる」活動の 継続要因の探索的検討

元嶋菜美香^{1)2)*}, 相羽枝莉子³⁾, 宮良俊行⁴⁾

Exploratory examination of the factors that contribute to the continuation of
daily “supporting sports” among young people

Namika MOTOSHIMA^{1)2)*}, Eriko AIBA³⁾, and Toshiyuki MIYARA⁴⁾

Abstract

The purpose of this study was to clarify the factors that contribute to the continuation of daily “supporting sports”, focusing on the young people who have experience in continuing such activities. We interviewed 8 people in their 20s and categorized the results using the KJ method.

As a result of the discussions among the three researchers, the results were summarized into four categories: positive/internal factors, positive/external factors, negative/internal factors, and negative/external factors. The most frequently answered factor for continuation was the positive/intrinsic factor, suggesting that an attitude of attachment for the activity is important for the continuation of daily supporting sports activities. In addition to positive factors, negative factors, such as a sense of obligation to the activity, were also suggested to be related to the continuation of the activity among young people. To solve the social problem of a shortage of human resources who “supporting sports” in daily life, in addition to fostering a sports enthusiast attitude in young people, it is necessary to create an environment in which activities can be continued in a fun and easygoing manner.

Key Words: sport volunteer, continuation factor, life stage

(Journal of Health Science, Kyushu University, 45: 35-44, 2023)

1) 九州産業大学健康・スポーツ科学センター Center for Health and Sports Science, Kyushu Sangyo University, Fukuoka, Japan

2) 九州大学大学院人間環境学研究院 Faculty of Human-environment Studies, Kyushu University, Fukuoka, Japan

3) 長崎国際大学人間社会学部 Faculty of Human and Social Studies, Nagasaki International University, Nagasaki, Japan

4) 聖カタリナ大学人間健康福祉学部 Faculty of Health and Welfare Human Services, St. Catherine University, Matsuyama-city, Ehime, Japan

*連絡先：九州産業大学健康・スポーツ科学センター 〒813-8503 福岡県福岡市東区松香台2丁目3番1号 Tel: 092-673-5345

*Correspondence to: Center for Health and Sports Science, Kyushu Sangyo University 2-3-1 Matsukadai, Higashi-ku, Fukuoka 813-8503, Japan
Tel: +81-92-673-5345 E-mail: motosima@ip.kyusan-u.ac.jp

緒言

令和5年度より、中学校運動部活動の地域スポーツ移行化が検討され、スポーツ指導やクラブ運営、スポーツ大会における審判などの活動に継続的に関与する人材確保が急務となっている。スポーツ場面における指導や運営などのスポーツ支援活動は、「スポーツを『ささえる』活動」と総称される¹⁾。その活動内容は、スポーツの指導やクラブの運営・世話といった日常的な活動と地域や全国・国際的なスポーツイベントにおける審判や運営に区分される²⁾。代表的な活動形態として、専門的な指導者やスポーツボランティアが挙げられるが、近年、アルバイトとして金銭的報酬を目的に活動に従事するなど、活動形態が多様化している。本研究では、第3期スポーツ基本計画³⁾および活動実態²⁾を踏まえ、スポーツ場面における指導・運営・補助的活動などのスポーツ支援活動のうち、日常的におこなわれるスポーツの指導やクラブの運営・世話を「日常的なスポーツを『ささえる』活動」と定義する。

地方公共団体がスポーツ指導者の質を保障・量を確保する方策として、運動部活動に所属する大学生に期待が寄せられている³⁾。これまでも、大学生は部活動を通じて依頼を受け、スポーツ指導やイベントの運営に貢献している⁴⁾⁵⁾。しかし、一過性のボランティア活動に着目が集まる一方で、活動の継続性については十分に検証されていない。日常的なスポーツを「ささえる」活動はスポーツイベントに比べ実施頻度が高く、継続的な関与が求められることから、活動継続を促進する要因や離脱予防に関する知見の集積は急務である。

スポーツを「ささえる」活動の継続要因として、学校運動部活動の外部指導者に対する調査では、「その競技が好き」「楽しい」「勝たせたい」などのポジティブな感情が挙げられている⁶⁾。また、志賀・荒井⁷⁾は、障害者スポーツのコーチにおける恩恵・促進要因として、「楽しいと感じる」などの短期的な効果と継続的な参加によって体験できる自己成長などの要因があること、阻害要因として知識・経験不足や負担感があることを明らかにした。一方で、大部分の学校運動部活動の顧問は、生徒指導の観点や管理職などの説得や圧力、職場環境などの理由から消極的な態度で継続していることが示唆されている⁸⁾。

対して、若年層の継続を促進する目的から、スポーツイベントに従事した大学生の意識変容が調査されている。例えば、良い・悪い経験をしながら仲間との協働によってモチベーションを高めること⁹⁾、強制的・消

極的参加者であっても活動を通して肯定的に捉えることが明らかになっている⁹⁾。また、障害者スポーツ団体に所属する大学生は、知的障害者に対するスポーツ指導やボランティアリーダーとしての活動の中で楽しい経験をすることで意識変容が起き、自発的な活動継続につながる可能性が示唆されている¹⁰⁾。活動継続要因の1つとして楽しさの根源に着目した先行研究では、大学生は活動を通して他者とのかかわり、感謝されることを「楽しい」と認識することが明らかになった¹¹⁾。これらの研究では、特定のスポーツイベントやスポーツボランティア団体に所属する大学生が対象となっており、多様化したスポーツを「ささえる」活動の一部の内容・形態に限定されている。また、活動継続に至る意識変容に焦点が当てられ、大学生の日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続要因を検討した研究はみられない。スポーツボランティアをはじめとしたスポーツを「ささえる」活動に対する認識の変化に伴い、大学生のスポーツを「ささえる」活動の継続要因もこれまでと異なる可能性が推測される。

日常的なスポーツを「ささえる」活動に従事した大学生は、参加者や保護者から大学卒業後の継続を求められる¹²⁾¹³⁾。しかし、大学卒業後の若年層を対象とした研究は乏しく、大学生と社会人といったライフステージの異なる若年層の継続要因は明らかとなっていない。山口ら¹⁴⁾は、大学生と20代の成人を若年層として統合しイベントボランティアの継続阻害要因を分析したが、大学生の特徴を反映している可能性が高いことを指摘している。部活動や授業の一環でスポーツを「ささえる」活動に従事する機会を有する大学生と、就業として「ささえる」活動に従事することが可能となる社会人では、継続要因が異なる可能性がある。また、大学生卒業後の20代の若年層を対象者に加えることで、大学卒業後のスポーツライフを念頭に置いたスポーツを「ささえる」活動の魅力を明らかにすることができると考える。以上を踏まえて、本研究は、日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続要因を、若年層の視点から明らかにすることを目的とした。

方法

1. 対象者の選定条件と選定方法

対象者は、1年以上の日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続経験を有する20代の成人であることを条件に選定した。対象者の選定は、属性や活動形態に偏りがなく、事前に調査対象者の典型性とその属性

の分布からサンプリング基準を作る統計的サンプリング¹⁵⁾をおこなった。具体的には、大学生と社会人を同数とし、性別や活動形態、対象とする活動領域に偏りがないうように選定した。また、対象者から得られた情報をもとに、次の面接対象者となりうる対象者を紹介してもらった。雪だるま式標本法¹⁶⁾を用いた。

2. 調査の手続き

調査に先立って、対象者の属性やスポーツを「ささえる」活動経験に関するフェイスシートの記入を求めた。本調査は、フェイスシートの回答結果を参照し、オンライン・インタビューとして Zoom を用いた 1 対 1 の半構造化面接を実施した。インタビューでは、インタビューガイドに従い、あらかじめ定めていた質問項目について対象者に回答を求めた。調査場所は、研究者は研究室とし、調査協力者に対しては指定せず、対象者にとって便利かつプライバシーの確保された静穏な場所を選ぶよう依頼した。

調査開始時に、調査の目的や方法、スポーツを「ささえる」活動や形態に関する簡単な説明をし、緊張をほぐすような雰囲気を作るよう努めた。フェイスシートの記述をもとに、調査時点や過去の状況（どんな活動をしているか）、主観的な視点（どう感じているか）を主な対象としつつ、遡及的な質問を加え、間接的に継続要因を明らかにすることとした¹⁵⁾。インタビューの内容は、ICレコーダーとメモによって記録された。インタビューの実施時間は、32～61 分（平均 46 分、合計 364 分）であった。調査期間は、2022 年 3～4 月であった。

3. 調査内容

先行研究⁷⁾を参照し、フェイスシートおよびインタビューガイドを作成した。次に、作成したインタビューガイドが対象者に理解しやすい適切な内容であるかを確認するために、スポーツを「ささえる」活動の継続経験がある社会人 1 名を対象に予備調査をおこなった。予備調査後、日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続要因を明らかにするうえで質問が適切かを調査対象者および共同研究者と議論し、インタビューガイドの文言を修正・追加した。本研究では、以下のフェイスシートおよびインタビューガイドに基づいてインタビューを実施した。複数の継続経験を有する者が確認された場合、それぞれの活動に対する継続要因を質問した。

1)フェイスシート：性別、年代、職業、専門種目と継

続年数、活動内容、活動形態、活動頻度、継続期間

2)インタビューガイド：①自身がスポーツをする中で、印象に残っている指導者や支えてくれた人物の有無、②スポーツを「ささえる」活動の内容、③活動を継続しようと思ったきっかけや印象的な出来事、④活動を離脱したい、休止したいと思った経験の有無（ある場合、なぜ継続したか）、⑤活動を続けることのメリットやプラスになること、継続の促進要因、⑥活動を続けることのデメリットやマイナスになること、継続の阻害要因、⑦複数の活動形態での活動経験を有する場合、継続要因の差異。

4. 分析の手順

日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続要因という新たな知見を得るために、KJ 法の分類手法を用いた記述の分類をおこなった。KJ 法にはいくつかのバージョンがあるが、1997 年版の KJ 法をもとに作成された手順¹⁷⁾を参考にした。分析は、研究責任者に加え、質的研究に関する知見を有し、地域スポーツに関する研究業績を有するスポーツ社会学を専門とする大学教員 1 名、スポーツ場面の感情に関する研究業績を有するスポーツ心理学を専門とする大学教員 1 名と協議をおこない、カテゴリ分析をおこなった。

インタビューで収集した口述内容をすべて文字化し、逐語録を作成した。この逐語録は、最終的に 104,854 字となった。まず、研究者間でのトライアングレーション¹⁵⁾の手法を取り入れ、3 名の研究者が逐語録の口述内容（以下、ローデータとする）を読み込み、「重要な用語」としてのべ 541 語を抽出した。次に、用語を精読し、継続促進要因 391 語、継続阻害要因 126 語、イベントボランティアの継続要因 5 語、初回の参加動機 19 語に分類した。本研究では書面の都合から阻害要因の検討は割愛し、継続的要因として抽出されたのべ 391 語を分析対象とした。

類似した「重要な用語」を集めてまとまりをつくり、まとまりごとに名前を付けた（以下、コードとする）。次に、類似した複数のコードを統合し、複数のコードからなるまとまりを形成し、名前を付けた（以下、サブカテゴリとする）。さらに、類似するコードを統合し、より大きなまとまりを形成し、名前を付けた（以下、カテゴリとする）。より適切なコード、サブカテゴリを統合する、既存のコード・カテゴリを解体して別のサブカテゴリに配置するといった作業を繰り返しておこなった。以下、カテゴリを【 】, サブカ

テゴリーを〈 〉, コードを『 』, 重要な用語を〔 〕, ローデータを「 】, 重要な用語に割り振られた番号をローデータの後ろに (No.数字) として表記した。

5. 倫理的配慮

本研究をおこなうにあたり, 九州産業大学倫理委員会の承認を得た。調査協力者に対して, 調査実施前に調査内容およびデータの使用方法等を書面および口頭にて説明し, 同意書への署名をもって同意を得た。調査協力者の同意を得たのち, IC レコーダーを用いてインタビュー内容を録音した。プライバシーへの配慮を目的とし, インタビューの様子や Zoom 画面上の撮影・録画はおこなわず, 個人が特定できないよう氏名や所属団体, 種目をはじめとした固有名詞は符号化した。

結果および考察

1. 対象者の属性

対象者の属性は, 男性 3 名, 女性 5 名, 平均年齢は 23.4 歳 (SD=2.13) であった (表 1)。このうち, 大学生および大学卒業後 1 か月以内の 20 代 4 名 (以下, 大学生とする), 20 代の社会人 4 名 (以下, 社会人とする) であった。日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続年数は 1~7 年, 活動頻度は月 2~週 5 回であった。

活動形態は, 就業 2 名, アルバイト 5 名, 無償ボランティア 3 名であり, 多様な活動形態が確認された。また, 活動するスポーツ環境は, 学校部活動 3 名, 地域スポーツ 6 名, 民間スポーツ 2 名であり, 同じ団体に所属するものはいなかった。大学生はスポーツボランティアをアルバイトと似た感覚で認識する傾向にあるが¹⁸⁾, すべての大学生がスポーツを「ささえる」活動をアルバイトとして継続した経験を有したことから, 実態を反映した結果となった。

2. 分類プロセス

研究方法の信頼性と妥当性を確保するために, 大規模なローデータの分類をおこなった先行研究⁹⁾を参照し, KJ 法の手法を用いて分類をおこなった。具体的な

手順として, ローデータから重要な用語を抽出, 抽出コードの生成, さらに抽象度を上げてサブカテゴリーの抽出, サブカテゴリーの統合によるカテゴリーを抽出していく分析の過程を例示した。ここでは, 書面の関係上, 結果の一部として, 【積極的/内的要因】カテゴリーのサブカテゴリーである〈活動の捉え方〉が, インタビューで得られたローデータから生成された過程を記載する。

〈活動の捉え方〉というサブカテゴリーは, 継続者の活動に対する肯定的な認識を示したものであり, 『愛着』, 『気楽さ』, 『感謝・恩返し』, 『負担感の少なさ』, 『自信』の 5 つのコードから生成されたものである。まず, 『愛着』は, 「もともと自分自身の性格的に, 人に教えるとかってというのがすごく好きで」(No.736) や 「好きなことって苦じゃないじゃないですか。本当に心の底から楽しいと思えてることなんで, 全然」(No.736) というローデータから抽出された [人に教えるとかってというのがすごく好き] や [本当に心の底から楽しい] などの「重要な用語」を整理したものである。

次に, 『気楽さ』は, 「その人たちがお金もらってたかっていったらもらなくて, 休みの日に顔出しにきたよぐらいだったので, それでいいんじゃないかなって思ってます」(No.15) や 「OB だからそういう古巣に行けるじゃないですか, ひょっと。OB だから, こんにちをはって行って, ちょっと球出して, (種目名) 教えてってというのができると思うんですよ」(No.458) というローデータから抽出された [休みの日に顔出しにきた] や [古巣に行ける] などを整理したものである。

また, 『感謝・恩返し』は, 「とにかく楽しく, (種目名) ってこんなに楽しいんだよ, みたいな。教えてくれた先生で」(No.615) や 「私もやってもらったしなっていう, 学生のときにいろいろと。中学校のときには, (略), 練習相手してくれたりとかゲームやってくれたりとかしてたんで, それを同じようにやってるっていうだけ」(No.14) というローデータから抽出された [と

表1 対象者の属性

対象者No	性別	年齢	属性	活動形態	活動領域	継続期間	実施頻度	継続状況	専門種目
予備調査	女性	20代	社会人	就業	地域スポーツ	5年	週4回	継続	球技
1	女性	27	社会人	無償ボランティア	部活動(中学)/部活動(高校)	2年/3~4年	週5回/月1回~ほぼ毎日	継続/離脱	球技
2	男性	22	大学生	アルバイト	地域スポーツ	1年	週2回	継続	陸上競技
3	男性	21	大学生	アルバイト	民間スポーツ	1年半	週2回	継続	球技
4	女性	23	社会人	就業	地域スポーツ	1年	週5回	継続	射撃競技
5	男性	26	社会人	就業/アルバイト	部活動(高校)/部活動(大学)/地域スポーツ	1年	週3回/4回/5回	継続	球技
6	女性	24	社会人	無償ボランティア	部活動(大学)	2年	月2回	継続	武道
7	女性	22	大学生	無償ボランティア/アルバイト	地域スポーツ/民間スポーツ	7年/3年	週1回/週3~4回	継続/離脱	ダンス
8	女性	22	大学生	アルバイト	地域スポーツ	1年半	週3回	離脱	陸上競技

にかく楽しく] や [私もやってもらった] などを整理したものである。

同様に、『自信』は、「言い方悪いかもしれないけど私ぐらいのレベルでも、多分、皆さんに刺激を与えられるぐらいの、今、レベルだなんて思ってるので」(No.64) などのローデータから抽出された [皆さんに刺激を与えられるぐらい] などを整理したものである。最後に、『負担感の少なさ』は、「今の働き方が一番、自分に合ってるなっていうふうに思います」(No.299) や「理不尽さとかがないほうが、若い子が増えるんじゃないかなと思います。やっぱり、(種目名) 指導者がすごい厳しいイメージだったり、体罰問題も多いのかなと思うので」(No.597) というローデータから抽出された [自分に合ってる] や [理不尽さとかがない] などを整理したものである。

その他のコードについても、上記のような過程でローデータからカテゴリーを整理し、最終的に採用した「重要な用語」はのべ392語、コードは40個、サブカテゴリー9個となった。サブカテゴリーの内容を精査し、自分の意志や動機づけなどの個人的な要因である「内的要因」と、環境や他者の存在などの環境的・対人的要因である「外的要因」に分類した。これは、イベントボランティアの継続阻害要因を個人的・構造的・対人的要因に分類した山口ら¹⁴⁾と類似した分類構造となっている。同様に、活動を肯定的に評価するなどの「積極的要因」と義務感や辞めることができない理由などの「消極的要因」に分類した。これは、活動を肯定的もしくは義務的に捉える大学生が混在すること¹⁸⁾、継続要因として「プレッシャー」や「義務」といった消極的な表現がみられること¹⁰⁾と類似した分類構造となっている。最終的に、継続要因を内的／外的および積極的／消極的の二軸から分類し、【積極的／内的要因】、【積極的／外的要因】、【消極的／内的要因】、【消極的／外的要因】の4個のカテゴリーへと集約された。

3. 積極的／内的な継続要因

【積極的／内的要因】カテゴリーは、〈スポーツの捉え方〉、〈活動の捉え方〉、〈活動の意欲〉、〈活動の心理的報酬〉の4つのサブカテゴリーから構成され、継続者のスポーツに対する肯定的な認識や意欲、活動を通して得られる心理的報酬を表している(表2)。

まず、〈スポーツの捉え方〉は、「長く続けるには、やっぱりまず、そのスポーツが好きっていうのは一番にあると思うし」(No.218) などのローデータから抽出

された『スポーツへの愛着』や『没頭』から構成されている。スポーツボランティアはその他のボランティア活動と異なり、スポーツに興味関心がある人の参加が多く、活動そのものを楽しむ傾向にある¹⁹⁾。また、青少年および成人のスポーツボランティアの実施率は、運動・スポーツにコミットしているものほど高いことから²⁰⁾²¹⁾、スポーツへの愛好的態度がスポーツを「ささえる」活動の継続に寄与する可能性が示唆された。一方で、『没頭』はライフステージによって回答に差異がみられ、スポーツに没頭した経験の有することが大学卒業後の活動継続に寄与する可能性が示された。

次に、〈活動の捉え方〉は「仕事だっってはならないので、どっちも本当に楽しくやらしてもらってるのは変わらないかなって」(No.269) などのローデータから抽出された『活動への愛着』などから構成されている。活動の楽しさは短期的に得られる効果として挙げられているが⁷⁾、1年以上の長期的な継続要因となることが示唆された。また、『活動への愛着』は7名の対象者から挙げられ、ライフステージに関わらず、若年層に共通する重要な要因であることが示唆された。スポーツを「ささえる」活動の継続要因として、仮説的に楽しさが重視されてきたが¹⁰⁾、スポーツを「ささえる」活動への愛着を最も重視することが示唆され、先行研究を追認する結果が得られた。一方で、『気楽さ』や『負担感の少なさ』は、ライフステージによって回答に差異がみられた。若年層がスポーツボランティアに対し消極的な考えを持っている背景には、労働が第一であり、ボランティア活動はゆとりのある者がおこなうと捉えていることが指摘されている²²⁾。大学卒業後の若年社会人は大学生よりも時間的・環境的制限が多く、活動を気軽に継続できる、継続による負担感が少ないと認識することが継続につながる可能性が示唆された。

さらに、〈活動への意欲〉は、「やっぱり上にいきたいっていう子たちの願いをかなえてあげたいっていう気持ちがすごく強かったので、私がやりますって言ってやりました」(No.717) などの『支援』、「プレーをやったことでできるっていう面白さもあったんで、そこを知らないで(種目名)を捨てないでほしいなっていう多分、気持ちがあつて。だから多分、やめるとか行かないみたいな、教えるのやめるとかは思わなかったですね」(No.71) などの『普及』などから構成されている。スポーツボランティアの動機づけやきっかけとして、約3割の若年層が「好きなスポーツの普及・支援」を挙げるが²³⁾、継続要因としても重要であること

が示唆された。

最後に、〈活動の心理的報酬〉は、「教えることで自分も学べるから今、(種目名) やってる人がそういう指導にも携わったほうがいいと思って」(No.495) などの『自己成長』、「競技をやっているときはやるときしか分かんないですけど、やっぱりこういう立場になってまた別の立場が見えたっていうところは、(種目名) をまた違う視点で捉えられたっていうのはいいところだったのかなとは思いますが」(No.589) などの『競技の理解』などから構成されている。「自己成長」はボランティアコーチの恩恵と促進要因として最も多く抽出されており⁷⁾、多世代にわたって共通する要因であると考えられる。また、スポーツイベントに従事した30代未満の若年層は、充実感や達成感、視野の広がりといった心的報酬を求めることから²⁴⁾、日常的なスポーツを「ささえる」活動においても心理的報酬を得ることが継続につながる可能性が示唆された。一方で、『競技の理解』といった要因が抽出され、スポーツ継続経験を有する若年層はスポーツを「ささえる」活動を通

して新たな視点の獲得があると考えられる。

4. 積極的/外的な継続要因

【積極的/外的要因】カテゴリーは、〈指導・支援の対象〉、〈重要な他者〉、〈実施形態〉の3つのサブカテゴリーから構成され、活動の対象者や関与する他者との関係性、活動の環境などの対人的・環境的要因への肯定的な認識を表している(表3)。

まず、〈指導・支援の対象者〉は、「ずっと見て見て、みたいな、蹴り方みたいなのを何回も言ってくるんで、かわいいなと思って見てましたね」(No.236) などの『対象者への愛着』、「やっとなみみたいな。ちょっとそれが印象強かったり、そういう成長が見られるっていうのが、印象に残りましたね」(No.206) などの『成長』から構成されている。対象者との交流を通して成長を見ることは長期的な効果⁷⁾や地域スポーツにおける指導・運営の楽しさの資源として挙げられている¹¹⁾。指導・支援の対象となる人との交流や成長を見ることが楽しさを生起するとともに、長期的な継続行動を促

表2 積極的/内的な継続要因と回答者数

サブカテゴリー	コード	重要な用語	大学生	社会人
スポーツの捉え方	愛着	自分が(種目名)が好きで、(種目名)を嫌いにならなかったな、ただの(種目名)が好きで一般の人、好きな競技のボランティア、そのスポーツが好き、好きなこと、そういったのが継続につながっていくんじゃないかな、そのスポーツが好き、本当に(種目名)が好きで、好きなんですよね、(種目名)が好きなんです、楽しくやってた	2	2
	没頭	根本的に自分が(種目名)やりたい、一日中、(種目名)していいんですよ、一日中、(種目名)でいいんですよ、楽しくやりたい、どんどん強くなりたいう気持ち	0	3
活動の捉え方	活動への愛着	自分が好きなことだった、人に教えるとかっていうのがすごく好きで、でも好きなんですよね、楽しいなって思います、楽しいうちから始める、週に1回ぐらい顔出しにしようよ、古巣に行けるじゃないですか、ひょっと、休みの日に顔出しにきたよ	3	4
	気楽さ	ちょっと体動かしたい、行こうかな、すごい気が楽、仕事だって感じでお仕事させてもらってるわけじゃなくて、ちょっと指導するところから始める、週に1回ぐらい顔出しにしようよ、古巣に行けるじゃないですか、ひょっと、休みの日に顔出しにきたよ	0	3
	感謝・恩返し	本当に尊敬できて、本当に指導者によって、とにかく楽しく、(種目名)ってこんなに楽しいんだよ、教えてもらった、私もやってもらったしないう	0	2
	自信	経験者だからわかる、説明をちゃんとやってあげないと、うまくなるものも本当にうまくならない、皆さんに刺激を与えられるぐらいの今の働きが一番、自分に合ってる、向かないな、体を常に動かしてるので、続けるのきついなは思ったことない、大変だけど、大変じゃない、理不尽さとかがない、マイナス要素って言われると、ない、なんも問題がない限り	0	1
活動の意欲	負担感の少なさ	みんなに伝えられればいいなと思って、つないでいかないと、私が教えていきたいっていう気持ちもすごく強かった、子どもたちにいっぱい教えてあげたいって気持ち、記録的に伸ばしたい、(団体名)やっていたから、これができるようになった、上に上がりたい、楽しくていうのをどっちも意識して、生徒を退屈させてはならない、より長くする、お客さんの話に耳を傾ける	1	3
	指導	子どもたちの運動の場を支えたい、自分の子どものためにもあるのかな、小学校の部活動がないので、(種目名)教室とか、子どもたちのサポートをしっかりしたい、例えばバスが上手にできないとかだったら、成功体験を増やす、子たちの願いをかなえてあげたい、ついてきてくれる方は一緒に上を目指しましょうって感じで、達成感、できた喜び	3	1
	育成	若い子たちに指導の経験を積ませてあげたい、マニュアル、あなたに任せますね、教えてみてね、ちょっとここだけお願い、指導者をどんどん広げたいらしいな	1	0
	普及	(種目名)の普及のために、興味を持ってほしい、(種目名)めっちゃ面白いからね、そこを知らないで(種目名)を捨てないでほしい、楽しさを伝えたい、子どもたち、まだ(種目名)の楽しさが分かってない、楽しさがない、その楽しさを教えていきたい、楽しくなって、(種目名)を好きになってほしい、運動は、いいこと、(種目名)してほしい、なんで続けられないのかな、続けさせたい、無理やりは、(種目名)続けてほしいとはなんもない、県の(種目名)を再建したい、好きでやってる(種目名)がこれから衰退していく、(種目名)部がなくなるとか、人が減ってるのって悲しくない?	2	3
活動の心理的報酬	体制の整備	実体験として感じている世代、考え変えていかないと、現場のギャップ、(種目名)の指導とか教育的なものでやっぱりいい雰囲気になるかな、若い人の意見が入りやすいような環境をまずはつくる、運営のメンバーの中に若い人が入るべき、メンバーの中にそういう幅広い世代の人たちが入る必要、(種目名)やってる人を巻き込まないといけない	0	2
	継続意志	辞めたくない、逆に責任感が生まれました、辞めたいは思ったことないです、絶対チームは守るっていう覚悟を決めて、覚悟を決めた、もうちょっと頑張ってみよう、もう一回、頑張ってみて、私こういうことをしたいわ、私の舞台に立ちたいわ、言いました	2	1
	やりがい	やりがい、常にやりがいを感じてます	1	1
	自己成長	こっちは発見がある、自分の勉強にもなる、こっちは勉強になるし、逆に学ぶいい機会、指導するから学べることってたくさんあって、教えることで自分も学べる、自分にとっての成長、常に勉強し続けたいいけない、指導者も変わっていかないといけない	1	3
指導技能の向上	競技の理解	剣道をまた違う視点で捉えられた、別の立場が見えた、指導者側に戻ったら、全体をみなきゃ、競技やってたとき自分が言われてたっていうのが分かった、指導することで、自分のプレーを振り返れる、自分のプレーの意識ももっと上がる、教えることで、その子たちもうまくなってる	1	2
	成功体験	言えることが増えますね、わかりやすく伝える、指導の経験、その考え方、その子たちはどう思ってるんだろう、子どもたちの考え方は大切	3	1
	付加価値	成功体験、成功できたなって感じる、自分がこうなってほしいなって思うようになってくれたとき、成功だったのかな	2	0
		そこがすごいメリット、たくさんある、自分のためにもなる	2	1

進する可能性が示唆された。

次に、〈重要な他者〉は、「これで仲間がどんどん見つかって、他の今、自分で（種目名）やってるけど指導やってないよっていう人たちも指導に入っていけるような環境っていうか」（No.34）などの『仲間・同僚』、「本当にそうやって電話をかけて誘っていただいたので、必要としてもらえたっていうのが一番かなって思います」（No.294）などの『必要とされる』から構成されている。日常的なスポーツボランティアの主な担い手は40代であるが²³⁾、同世代の仲間を望む意見がみられ、若年化によって継続を促進する可能性が示唆された。また、『必要とされる』は、他者からの依頼を自身の能力の承認と肯定的に捉えることで、積極的な継続行動につながる可能性が示唆された。加えて、「指導者が不足していて、中学校とか顧問はいるけど（種目名）専門じゃないとか。中学校では結構、そういう問題があって」（No.430）や「中学校の練習がないときに母校に行っていました、指導。指導者がいなかったんで、かわいそうだなと思って」（No.55）のように、指導者の不在をスポーツ現場の問題点と捉え、改善のために積極的に活動を継続する者が確認された。

最後に、〈実施形態〉は、「でも何も得るものがない

わけじゃないと思うんですけど、でもお金をつて思う方のほうが多いんじゃないかなって個人的には思いますね」（No.281）などの『謝礼・謝金』、「みんな、ボランティアでもったいないとか言われるんですけど、お金をもらってやる、お金をもらうからやるよみたいなのがあんまり好きじゃなくて」（No.13）などの『ボランティア』から構成されている。若年層の約10%はスポーツボランティアに実費程度の報酬を望み²³⁾、若年層の活動阻害要因として活動時間の長さや費用負担などの構造的要因を挙げられている先行研究¹⁴⁾を支持する結果が得られ、特に大学生においてアルバイトや雇用などの活動形態によって継続が促進されることが示唆された。一方で、活動形態にこだわらない、無償ボランティアを希望する回答もみられ、先行研究の知見も一致していないことから、活動形態の差異については今後更なる検討が必要である。例えば、スポーツボランティアをアルバイトのように認識する大学生は活動意欲が高い一方で¹⁸⁾、他者からの依頼や報酬を動機としたスポーツボランティアは燃え尽きにつながることを示唆されており²⁵⁾、外的な継続要因と継続意志および継続行動の関係について検証する必要がある。

表3 積極的/外的な継続要因と回答者数

サブカテゴリ	コード	重要な用語	大学生	社会人
愛着		かわいいな、子どもたちかわいいし、割とやってくれる、すごいいいプレーヤーになるけどなっていう子、慕ってくれたり、言ってくる（団体名）に行きたいって思ってくれる子ども、また次のシーズンも来たいですとかいうのを聞いて、（種目名）学びたい人がたくさんいる、（種目名）の指導を受けたっていう子がたくさん来て、キックの練習教えてあげるっていう約束、約束を2人でして、（種目名）があるのを楽しみにしている子、興味があるのかなと思って、うれしいなって、（種目名）を続けたいって言ってた子がずっと続けたり、うれしいな、続けるって言ってくれる子たちが増える	1	3
	意欲的	コミュニケーションは取りやすい、いろんな人と触れ合っている話を聞いて、会話が広がったり、子どもたちが覚えてくれて、学生と距離が縮まったり、指導のしやすさ、年が近いから、（種目名）を通して、人間関係、親とか子どもたちのつながりが多く生まれた、そうじゃないとことでの関わり	3	1
指導・支援の対象者	交流	結果を残す、結果を残していったところ、みんなの願いがかなって良かった、頑張ってくれて良かった	2	2
	成果	キック上達して、成長がみられる、どんだけ成長したかを見たり、成長がすぐ見れたから、面白い、（団体名）に行きたいから宿題を終わらせるようになった、（団体名）のおかげで勉強もちゃんとするようになった、子どもたちの行動が変わった、選手のプレーが変わったの選手が分かったときの表情、指導者っぽくなっていうか、指導者に変わってきた	1	0
	成長	感謝されたりすると、学生から感謝されたり、いろんな子から本当について良かったですとか、卒業しますとかっていうときに、子どもたちが手紙くれた	3	1
感謝		仲間がどんどん見つかって、もう一人のアルバイトの子と、話し合いをしました、2人で、もう1人の子（種目名）を高校のとき、して、ずっと高め合ってた、本当に前向きで、職場の人たちと関係性が一番よく築けそうだなと思った、周りの人たちが良過ぎる、本当すごいな、そこにいらせてもらえて感謝、一緒に仕事している人たちの考え方がすごい共感できる、お金を生み出してる、これだけの事業をできるのって本当にすごい、親が本部をやってるので、そこで関わりとかがあった	2	2
	仲間・同僚	指導者がいなかった、指導者が不足、監督の中には、本当に自分がプレーヤーじゃなかった、監督が（種目名）専門じゃなくて、体験したことない指導者、先生も「（氏名）さん、どう思いますか」みたいな感じで言うから、監督さんも面白いねみたいな感じ、監督さんが柔軟	0	2
重要な他者	必要とされる	お願いされたり行く、来てほしいところに行けばいい、ありがたいです、必要としてもらえた、覚えててくださって、声を掛けてもらえた、認められる、自分だけ誘われた	1	2
	評価される	評価が上がっている、保護者のクチコミ、任せて良かったわ、任せて良かったなって言わせてやろう、この年齢でもちゃんと教えていけますっていうのを、悔しかったんです、自分からお母さんがたにお話をしにいったりとか、認めてもらえれば、参加する子どもが増えた、自然とお客さんが集まってきてくれた	2	1
他者とのつながり	いろいろな人とながれる、人とのつながり、（種目名）やってなくてもつながりたいな、（種目名）じゃなくてもつながりたい、違う場面ではつながりたい、外部コーチを辞めたら途切れるんじゃないか、実習、行ったら就職する予定の場所	1	1	
実施形態	謝礼・謝金	謝礼、お弁当出たらラッキー、交通費、お金をもらえるとなると、お金をつて思う方のほうが多いんじゃないか、お金を頂いてるので、やっぱりその分、結果を出さなきゃいけない、はい、結構意識して、お金をもらって仕事をやるほうが、お金をもらって指導をするほうが、お客さまの命を預かってる、責任の問題、特にもらってるほうだったら、ちゃんとさせたい、もっとちゃんとしないとな	3	1
	雇用・就業	雇用、就活は、ほぼしてない、直接、就職したいですっていうのを伝えて、（種目名）につなげて、なんかビジネスをしないといけない、ボランティアよりはバイト、アルバイトを募集するのが一番いい	1	1
	ボランティア	お金をもらうからやるよみたいなのがあんまり好きじゃなくて	0	1
こだわらない	全然バイトだからボランティアだからとかいう差はなく、違いはもうないです、基本的に考え方は変わらない、地道にボランティアだろうが何だろうがやっています、チームとか選手のために（種目名）を教えるだけ	2	2	

5. 消極的／内的および消極的／外的な継続要因

【消極的／外的要因】カテゴリーは、〈活動の意欲〉から構成され、活動継続への義務感や離脱を否定的にとらえた感情を表している。また、【消極的／外的要因】カテゴリーは、〈重要な他者〉から構成され、指導者の不在や依頼者との関係性から継続せざるを得ない対人的・環境的要因を表している（表4）。

まず、〈活動の意欲〉は、「自分の気持ちの中で、結構、義務って感じですかね」（No.125）などの『義務感』、「ここでちょっと辞めるのももったいないなっていうのもあって、それでもうやるしかないよねみたいな感じで」（No.31）などの『固執』から構成されている。活動を義務的・強制的にとらえる大学生は活動意欲が低いことから、義務感はスポーツボランティア活動の阻害要因として認識されている²⁶⁾。一方で、大学生の運動部活動の継続要因として、辞めることによる問題発生の回避や自己の設定した目標への固執が挙げられ²⁷⁾、義務的・強制的な継続意志がスポーツ参加行動を規定することが示されている²⁸⁾。運動部活動と同様にスポーツを「ささえる」活動において消極的な継続要因が確認された背景には、活動継続に伴い「果たすべき責任」や「当該活動の優先」といった使命感を形成すること¹⁰⁾が関係すると推測される。

次に、〈重要な他者〉は、「きついなとか思うのは、たまにありましたね。（中略）自分たちが休んだら指導者いないし」（No.840）などの『指導者の不在』、「なんで辞めなかったんですかね。自分が言い出せなかったってのもあるかもしれない」（No.593）などの『断れない』から構成される。人材不足や体制の不備は活動継続の阻害要因として挙げられているが⁷⁾、他の教員との関係や環境的要因から消極的に運動部活動の顧問を継続する教員が確認されている⁸⁾。本研究では、ボランティアやアルバイトであっても継続せざるを得ない状況や他者との関係性から活動を継続している若年層の存在が確認された。消極的な継続要因は、積極的な継続要因に比べ回答数が少なかったが、強制感や義務感は強い負担感と関係し、離脱行動につながる可能性があることから、スポーツを「ささえる」若年層をマネジ

メントする立場の理解が求められる。

本研究の問題点と今後の課題

本研究の課題として、多様な継続要因の抽出にとどまり、属性や実施形態、継続意志の強さや継続期間による差異が検討できていない。例えば、活動のイメージや阻害要因に性別による差異があることが示唆されているが¹⁴⁾¹⁸⁾、継続要因においても性別による回答の偏りがみられる可能性がある。加えて、本研究では、無償ボランティアとアルバイトなどの有給職員の間段的に位置する有償ボランティア²⁹⁾や、自己のスポーツ支援活動をボランティアとして認識していない無自覚ボランティア²⁾を対象にできていない。今後、量的研究によって属性や活動形態、ライフステージによる比較をおこなう必要がある。併せて、本研究で抽出された継続要因の重要度と継続意志やその後の継続行動の関係性を検証するに至っていない。例えば、スポーツの楽しさが継続意志を媒介して参加・継続行動を規定することが示唆されていることから³⁰⁾³¹⁾、〔活動の愛着〕の継続意志や継続行動への規定力を明らかにすることで、一過性の参加にとどまらないスポーツを「ささえる」活動の継続的関与のためのマネジメントが可能となると考える。

次に、活動離脱者や複数の活動継続経験を有する対象者が含まれることが挙げられる。その結果、継続要因の抽出にとどまり、活動離脱や再開に至る意識変容やその背景にある経験について深く探索することができていない。また、類似する外的要因について認知の違いが確認されたことが挙げられる。例えば、「指導者の不在」を解決すべき問題と捉え積極的に関与する動機と捉えた対象者と、継続から離脱できない原因と捉えた対象者が確認された。同様に、「重要な他者からの依頼」を自身の能力を必要とされた肯定的に捉える者と、やや強制的に捉え断れないと感じる者が確認されたが、認識の違いに至る原因について追及できていない。今後、グランテッド・セオリー・アプローチによる継続要因の関係の整理や、対象者ごとにライフヒストリーとして系列的に整理する、統合的質的研究法

表4 消極的／内的および消極的／外的な継続要因と回答者数

サブカテゴリー	コード	重要な用語	大学生	社会人
活動の意欲	義務感	義務って感じ、行かないって選択肢ができない、関わらないって選択肢があんまりなかった、バイトだけど、行かないといけいな、評価的にも行ったほうがいいな	1	1
	固執	最近はずっと悩んでた、もう辞めようかな、気持ちがもう無理だったら辞めようかな、（種目名）をこの先、続けようか続けないか、せっかくここまでやってきた、がっつり辞めるのもなんだかな、やめるのもったいない	0	2
重要な他者	指導者の不在	指導者がいない、自分たちが休んだら指導者いない	1	0
	断れない	自分が言い出せなかった、その押しに負けた	0	1

によるインタビュー内容の要約的整理が必要である。

若年層の日常的なスポーツを「ささえる」活動への参画は、スポーツ環境の維持に不可欠であるだけでなく、定期的なスポーツ活動の機会となる。例えば、山崎・植田³²⁾は障害者スポーツボランティアとして「ささえる」活動に加え自身も競技者としてスポーツをおこなう形態を「競技参加型ボランティア」とし、競技の参加が結果としてささえる活動につながることを示唆している。また、スポーツを「ささえる」活動を通して、多様な人との交流、知識・経験の活用、自分自身がスポーツを楽しめるなどの効果が挙げられる³³⁾。教育活動の一環としてスポーツの多様な楽しさや喜びを味わうことができるような学習機会の整備が求められるが³⁴⁾、卒業後の継続的なスポーツライフの形成という長期的な視点をもった活動の選定が望まれる。

まとめ

本研究の目的は、日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続経験を有する若年層の視点に着目し、活動継続に寄与する要因を明らかにすることである。20代の男女8名を対象にインタビュー調査をおこない、得られた結果をKJ法の分類手法を用いて分類した。

3名の研究者の合議の結果、【積極的／内的要因】、【積極的／外的要因】、【消極的／内的要因】、【消極的／外的要因】の4個のカテゴリーへと集約され、若年層の継続には積極的要因に加え、活動への義務感などの消極的要因が関係することが示唆された。また、最も多く回答された継続要因は、【積極的／内的要因】カテゴリーの〈活動の捉え方〉〔活動の愛着〕であったことから、日常的なスポーツを「ささえる」活動の継続には、活動の愛好的態度が重要であることが示唆された。社会的問題となっている日常的なスポーツを「ささえる」人材不足を解消するためには、若年層のスポーツの愛好的態度の育成に加え、楽しく気楽に継続できる活動環境の構築が求められる。また、ライフステージに関わらず複数の継続要因が関係するとともに、消極的な継続要因が確認されたことから、離脱を予防するために継続者のマネジメントが必要である。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2022): 第3期スポーツ基本計画. https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf (参照日 2022年5月15日)
- 2) 笹川スポーツ財団 (2019): スポーツボランティア

に関する調査 2019. https://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/report_volunteer2019_all.pdf (参照日 2023年1月5日)

- 3) スポーツ庁 (2022a): 運動部活動の地域移行に関する検討会議提言-一少子化の中、将来にわたり我が国の子供たちがスポーツに継続して親しむことができる機会の確保に向けて-. https://www.mext.go.jp/sports/content/20220722-spt_oripara-000023182_2.pdf (参照日 2023年1月5日)
- 4) 清宮孝文, 依田充代(2019): 大学生のスポーツボランティアへの参加・不参加動機: 体育系大学生に着目して. 運動とスポーツの科学, 25(1): 21-28.
- 5) 豊田則成, 金森雅夫 (2007): スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは? びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から. びわ湖成蹊スポーツ大学研究紀要, 4: 9-18.
- 6) 青柳健隆, 石井香織, 柴田愛, 荒井弘和, 日比千里, 岡浩一郎 (2013): 外部指導者の部活動への関与を推進する効果的な方策の検討, SSF スポーツ政策研究, 2(1): 252-259.
- 7) 志賀真珠美, 荒井弘和 (2013): スペシャルオリンピックスのボランティアコーチの活動に関連する要因. スポーツ産業学研究, 23(2): 241-247.
- 8) 中澤篤史 (2012): 学校運動部活動への教師のかかわりに関する記述的研究-消極的な顧問教師が離脱しない理由と文脈の考察-. 一橋大学スポーツ研究, 31: 29-38.
- 9) 山下博武, 行實鉄平 (2015): スポーツ・ボランティアに関する研究動向: スポーツ経営学からの批判的考察. 徳島大学人間科学研究, 23: 39-55.
- 10) 大山祐太, 増田貴人, 安藤房治 (2012): 知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアの継続参加プロセス-スペシャルオリンピックス日本・青森の事例から-. 障害者スポーツ科学, 10(1): 35-44.
- 11) 元嶋菜美香, 宮本彩, 神野周太郎, 田井健太郎, 熊谷賢哉, 宮良俊行 (2021): 大学が運営する地域スポーツ教室の楽しさの検討-大学生の「ささえるスポーツ」の視点に着目して-. スポーツ産業学研究, 31(1): 31-39.
- 12) 大山祐太, 増田貴人, 安藤房治 (2011): 知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアに対する保護者の意識. 弘前大学教育学部紀要, 106: 23-30.
- 13) 大山祐太 (2017): 知的障害者スポーツにおけるマネジメントモデル構築に関する研究-若年層ボラン

- ティアの活動継続性向上を企図して－. 弘前大学大学院学位論文.
- 14) 山口志郎, 松村浩貴, 土肥隆, 伊藤克広, 舩越達也 (2018): スポーツイベントボランティアの阻害要因: 神戸マラソンにおける年齢, 性別, および参加回数別による比較. 生涯スポーツ学研究, 15(1): 25-38.
- 15) ウヴェ・フリック著 (2002): 小田博志, 春日常, 山本則子, 宮地尚子 (訳) 質的研究入門: 「人間の科学」のための方法論, 春秋社, pp. 143-146, 166-168, 491-543.
- 16) 鈴木淳子 (2002): 調査的面接の技法 (第2版). ナカニシヤ出版, p. 58.
- 17) 田中博晃 (2013): KJ法クイックマニュアル, 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロロジー研究部会 2012年度報告論集, 102-106.
- 18) 清宮孝文, 依田充代, 門屋貴久, 阿部征大 (2021): 体育系大学生のスポーツボランティアに対するイメージの類型化: スポーツボランティア活動に「意欲的な学生」と「意欲的ではない学生」の特徴に着目して. 日本体育大学紀要, 50: 1019-1029.
- 19) 二宮雅也 (2020): 「大学生のボランティア活動等に関する調査」報告書. 第5章スポーツボランティアと大学教育. 国立青少年教育振興機構. https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/142/ (参照日 2022年11月7日)
- 20) 笹川スポーツ財団 (2021): 子ども・青少年のスポーツライフデータ 2021-4~21歳のスポーツライフに関する調査報告書－. 笹川スポーツ財団, p.137.
- 21) 笹川スポーツ財団 (2020): スポーツライフデータ 2020 - スポーツライフに関する調査報告書 - . 笹川スポーツ財団, p.77.
- 22) 山口志郎, Sheranne Fairley, 伊藤央二 (2017): 日本におけるスポーツボランティアの概念化に関する質的研究－スポーツボランティア文化の構築に向けて－. 笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, 6(1): 40-48.
- 23) スポーツ庁 (2022b): 令和3年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」. https://www.mext.go.jp/sports/content/20220310-spt_kensport01-000020487_5.pdf (参照日 2022年11月7日)
- 24) 新出昌明, 山田秀樹, 石井十郎 (2019): スポーツイベントにおけるボランティア活動参加への重要度に関する研究. 東海大学国際文化学部紀要, 11: 105-112.
- 25) 田引俊和 (2005): 知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究. 医療福祉研究, 1: 37-57.
- 26) 清宮孝文 (2022): 大学生のスポーツボランティア活動に対する意欲－属性による差異に着目して－. 静岡産業大学論集, 6(1): 13-22.
- 27) 山本教人 (1990): 大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較. 体育学研究, 35(2): 109-119.
- 28) Hagiwara, G. (2017): Relationship between Sport Participation Behavior and the Two Types of Sport Commitment of Japanese Student Athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 17(4): 2412-2416.
- 29) 労働政策研究・研修機構 (2006): 労働政策研究報告書 No.60 NPOの有給職員とボランティア－その働き方と意識－. <https://www.jil.go.jp/institute/reports/2006/060.html> (参照日 2022年11月27日)
- 30) Weiss, M. R. and Amorose, A. J. (2008): Motivational orientations and sport behavior. In T.S. Horn (Ed.) *Advances in sport psychology* (3rd ed), Champaign, IL: Human Kinetics. 115-155.
- 31) 久崎孝浩, 石山貴章 (2012): スポーツに参加する子どもの心理的発達に及ぼす大人の影響: その研究動向と今後の方向性. 応用障害心理学研究, 11: 45-67.
- 32) 山崎貴史, 植田俊 (2021): 障害者スポーツ・ボランティアに関する社会学的研究: スポーツ実践者とボランティアの関わりに着目して. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 138: 427-440.
- 33) 笹川スポーツ財団 (2015): スポーツにおけるボランティア活動活性化のための調査研究 (スポーツにおけるボランティア活動を実施する個人に関する調査研究) 報告書. https://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/2014_report_22.pdf (参照日 2022年11月14日)
- 34) 望月拓実, 柴田紘希, 斎藤麗, 菅谷美沙都, 横山剛士, 石井十郎, 川崎登志喜, 藤田雅文, 中路恭平 (2021): 大学生のスポーツライフの実態からみる生涯スポーツ普及に向けた課題の検討. 体育・スポーツ経営学研究, 34: 45-63.